

天然秋田スギの 葉枯し材について (835)

藤里営林署 荒川好徳

1 はじめに

藤里署では、これまで天然秋田スギの生産量を年2000 m³程度のペースで生産してきており、今後この程度の生産量で推移させれば平成10年度頃までは計画を継続できる見通しであります。

この数量を今年度の秋田局の天然秋田スギ生産量で見ますと約9%に当たり、また、当署の素材生産量の22%を占めており、減少していく天然秋田スギを生産する数少ない署として、そのウエートはますます高まるものと考えております。

天然秋田スギについては、その希少価値を唱えられて久しいが、ただ単に希少価値に安住しているのではなく、より付加価値の向上を図ることが肝要であります。そのため、当署では営林局の指導を受けながら700～800 m³の「葉枯し材」を生産しております。

しかしながら、葉枯し材については秋田スギの場合はいろいろ研究されて資料も沢山ありますが、天然秋田スギの場合は、秋田スギほどの生産実績もなく、したがって、その資料も不足がつてあります。当署では3年ほど前から葉枯し材の生産に際して含水率の調査をするため、試供木を選定しながら経過観察等を行ってきましたが、今回、これら葉枯し材の含水率及び葉枯し材として販売したものを買受人がどのような意識でとらえ、どのように製品に生かされているかなどについて、一定の追跡調査をしながらその内容を考察したので発表させていただきます。

2 葉枯し材の調査木の選定方法について

葉枯し材生産量全体の中から含水率を調査するため、試供木をあらかじめ選定したが、その方法は次のとおりであります。

- (1) 試供木は10本として、胸高直径の範囲を40～90 cmとした。
- (2) 林地傾斜20～30°の東斜面で風通しのよい箇所を選定した。
- (3) 試供木は沢部及び沢部から上方50メートル程度の間にあるものを選定した。
- (4) 伐倒時期は8月上旬(8月8日～9日)とし、伐倒方向は入山とした。
- (5) 伐倒木の元口に伐倒月日を記入し、乾燥期間を明確に確認できるようにした。
- (6) 乾燥期間は50日間とした。

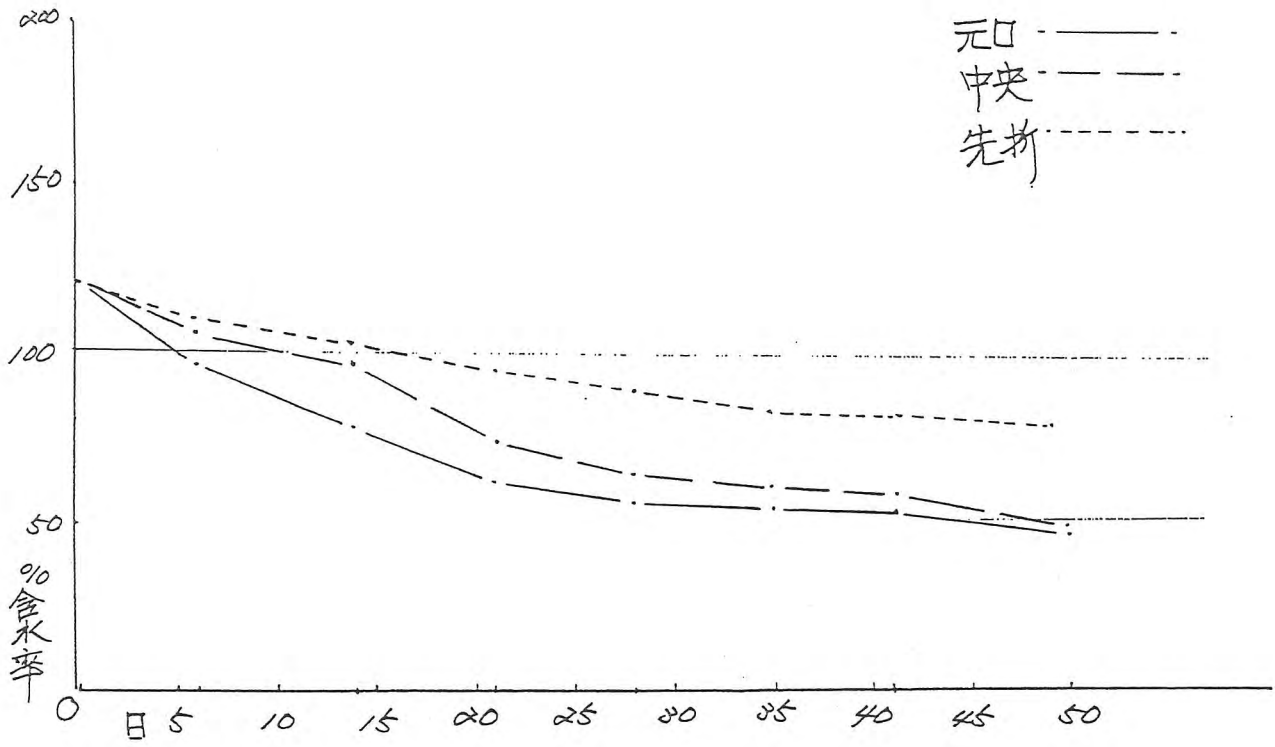
3 含水率の調査について

(1) 含水率の調査方法

- ① 含水率の調査は1週間に1回、都合7回実施した。
 - ② 含水率測定箇所は伐倒木の元口、中央部分の2箇所とした。
 - ③ 調査した試供木10本の中には、伐倒時点で先折れしたもの2本を含めた。
- (2) 含水率の調査結果は別紙表-1のとおりである。
 - (3) 含水率の調査結果の分析について

表-1

含水率調查表 (元口. 中央)



①伐倒時点での含水率は総じて約120%程度であった。秋田スギのそれは約150%とされていることからすれば、天然秋田スギの場合は30%程度含水率が低いことになる。

②調査部位による含水率の推移

○元口・・・伐倒後35日間経過した時点の含水率の平均値は52%であるが、その中には、30%台が2本含まれている。

35日を過ぎると下降曲線はゆるやかになり50日目までに約10%程度さらに含水率が低下している。

○中央・・・伐倒後2週間までは、元口部分に比較して15%程度下降が鈍い結果になっているが、35日目あたりでは、元口部分とほぼ同程度の含水率で下降する。したがって、伐倒木の部位による含水率は最終的には大きな相違はないことが解った。

○先折れ木については、比較的下降曲線は緩やかであり、かつ、35日間経過以降は含水率の下降はほとんど見られず、50日目でも70%台と高い結果となっている。

(4) 調査結果から今後参考となる事項

①伐倒時点の天然秋田スギの含水率は、造スギのそれと比較して30%も低い。

②含水率は元口から次第に中央部へと低下していく。

③伐倒木の含水率は伐倒後35日目で総じて50%程度まで下降することから、葉枯し材の乾燥期間は35日程度で十分であるとも考えられる。

④伐倒時点で留意すべきこととして、先折れは注意を要する。伐倒後の葉からの蒸散作用が止まるために乾燥度合いが鈍ものと考えられる。

4 葉枯し材の伐倒後の虫害対策について

伐倒後長期間にわたり林地に放置しておく形をとることになりますので、虫害による材質の低下が最も心配される点であります。現在、当署としては次の点に留意して実行しております。

(1) 伐倒時期について、8月上旬以降とすること、今回の試供木については、虫害の形跡は一切ありませんでした。

(2) 素材の虫害防除として、山土場に塩を散布する方法を基本に、必要によっては素材に直接「塩」を散布することも行っています。

5 葉枯し材買受者の追跡調査について

天然秋田スギの葉枯し材の買受者が葉枯し材に対してどのような意識を持ち、それを製品とする場合、どのように生かされているのかという点について、アンケートによる追跡調査を試みました。

(1) アンケート調査の対象とした顧客は20社です。

(2) アンケート回収率は19社(95%)です。

(3) アンケート調査結果は、別表-2のとおりです。

天然秋田スギ、葉枯し材についてアンケート調査結果

1. お買い上げ戴きました天然秋田スギは葉枯し材でしたか。

(イ) 葉枯し材であった。	7社	36%
(ロ) 普通材であった。	6社	32%
(ハ) 葉枯し材及び普通材であった。	6社	32%

2. 葉枯し材の場合、含水率50~80%程度で生産販売していますがいかがでしたか

(イ) 高い	2社	13%
(ロ) 良い	6社	38%
(ハ) 低い	0社	0%
(ニ) 不明	7社	44%
(ホ) 含水率は50%程度が良い。	1社	5%

3. 葉枯し材は製品価格に反映されましたか。

(イ) 反映された。	1社	6%
(ロ) 少々反映された。	6社	33%
(ハ) 反映されない。	11社	61%

4. 工場での作業お工期に与える影響は。(重量、割れやすい、傷つきやすい)

(イ) 良い。	11社	61%
(ロ) 変わらない。	5社	28%
(ハ) 悪い。	0社	0%
(ニ) その他(天然乾燥はためからない)	2社	11%

5. 葉枯し材製品の色、ツヤについて。

(イ) 良い。	11社	61%
(ロ) 変わらない。	6社	33%
(ハ) 悪い。	0社	0%
(ニ) その他。	1社	6%

6. 葉枯し材生産について今後も必要だと思いますか。

(イ) 必要だ。	11社	61%
(ロ) 必要でない。	0社	0%
(ハ) どちらとも言えない。	7社	39%

7. その他葉枯し材生産について要望事項

- 葉枯し材は伐倒時期が大切、梅雨期の水分が多い時期は日割れを起こす。
- 伐倒時期は8月20日以降か4月中に、5月~8月上旬では葉枯し材の色が悪く割れやすい。
- 葉枯し材は作業性も良く、メリットがあるので必要だと思うが単価が高くなるのではないかと心配だ。
- 運搬関係ではメリットがあるが、腐れや虫害が心配だ。
- 良材を主体に葉枯し材にしてほしい。
- 天然秋田スギの場合の葉枯し材は余り関係がない。
- 公売明細書に葉枯し材と明記してほしい。

(4) アンケート調査結果の分析について

- ①葉枯し材に関心を持っている会社は60%強になっており、他の会社は自然乾燥で対応していると答えた社がほとんどです。今後、さらに関心は高まるものと推察できます。
- ②虫害による品質の低下を懸念する社が5社であり、総じて伐倒時期を8月中旬以降とする秋型の葉枯し材を要望されていることが解ります。
- ③葉枯し材に関心を示している社では、運搬関係で重量の軽減によるメリットを認めております。(重量の軽減については、含水率70%で伐倒時の重量より23%の軽減、含水率50%では32%の軽減になる計算になります。)
- ④丸太の品質については、色・つやについて60%強の社が「良い」と答えている。
- ⑤公売明細書に「葉枯し材」の表示はしておりますが、2社ほど明記の要望があったことは、天然秋田スギについては葉枯し材を生産していないという先入観があったためと考えられ、今後のPRが課題であります。
- ⑥顧客側の心理として、葉枯し材の生産が拡大されることによって販売単価の上昇を懸念されている向きもあります。

6 葉枯し材の販売上のメリットについて

当署では今年度、葉枯し材を約650㎡販売しましたが、買い手側の意識の問題等から結果として価格に反映されているものはわずかであると認識している。

天スギの特性から、色・つやなど材質の優れているものは値開率も高いわけで、端的に販売単価の比較は困難であるが、葉枯し材を生産することによる、「色のあがり」など促進されるので、それなりに販売単価への波及効果あるものと考えている。

7 考 察

以上、当署における葉枯し材生産について、大まかなまとめになりましたが、報告させていただきました。今後の課題としては、アンケート調査にありますように、いまだ40%弱の社では、葉枯し材に関心さえ寄せていません、一つはより一層のPRが必要であると痛感することです。

また、品質の確保という観点から、一様に8月中旬以降の伐倒を望んでいることも解りました。虫害予防については、こと葉枯し材に限ったことではありませんから、品質管理上から伐倒時期の設定、虫害予防の有効な手段の工夫と普及定着が急がれるところです。

葉枯し材としての乾燥材の必要性を強調してる11社が現にあることを力として、天然秋田スギ葉枯し材をブランド化すると共にその付加価値を高めるためさらに努力する必要があると考えております。